

「て」語法の問題

現代語に於ける助詞の「て」は多くの問題を含む語である。これを「て」語法の問題として一括して考え、ここにはその中の一を、補動詞と關係づけて述べよう。

一地方語の上にこれを見れば、現實の生活語に於ける「て」語法の、書きこぼのそれに對する一特色を認めさせる。伊勢中部の方言では大凡、「て」と密接な結合をなす次のような補動詞があげられるが、これらは皆、本來の動詞としての用法をも備える一方、「て」に導かれることによつて補動詞の位置を占めるものである。

(1) ○ナニシテゴザンノ。(何していられるの。)

○ミセテイダギマシヨ。(見せて頂きましょう。)

○ツクツテモロタニ。(作つて貰つたよ。)

○シテクレヤヘンニ。(して呉ればしないよ。)

○ア、イツテシモタ。(あ、行つてしまつた。)

○イツテクルゾヤ。(行つてくるよ。)

○トンデミヨニ。(飛んでみようよ。)

○ナニシテウサツター。(何していたのか)

ッ。)

○ナニシテケツカルツ。(言してんだッ。)

(2)「て」が補動詞語頭音と合音化するもの

○カイタアルノニ(書いてあるのに。)

○ハイツトルナリ(這入っているねえ。)

○ハヨシトオクレ。(早くしてお呉れ。)

○ヨールイテク(苦もなく歩いてゆくよ。)

○カイトク。(書いて置け。)

○エーナ、コータルデ。(言うな。買つてやるから。)

○ン、シタゲルワー。(ん、してあげる。)

(3)、(1)にも(2)にもなる補動詞。

○オイナサル ○オイナハル

○オイデル ○オイナル

以上は孰れも例示の如く、文中にあつて「て」に導かれて一の混体をなすものであるが、その際の「て」は混体形成の手段としての役割を果している。特に(2)は意味上の混成が音韻の上によつて變化を齎した例であつて、いかにも混体なることを明示している。さて、しかもこの種の補動詞的表現は、言語生活の基礎的要求に應ずるもので、書きこばに對しては正に方言の一つの特色をなしているのであるが、かような補動詞表現は、右に見る如き「て」の用いざまに「て」語法と共

に成立するものと言ふことができる。

尙、所謂接續助詞の用法の場合は、文末助

詞ナリ・サ・ノ等や間投詞を導き出して、事

柄叙述の展開を果すのが普通である。例えば

○ソレカラエキーイツテサ。(それから、

驛へ行つてね。)

(佐藤虎男)